

富士山のイメージ

〈静岡県富士山世界遺産センター 企画総務課 課長 小室 勝彦〉

子どもの頃、富士山が見えない地域で育った私は、富士山の山頂のことを考えると怖い気持ちになった。

当時見たアニメの影響なのだろうか。富士山の山頂に立つと火口には溶岩が見える。ドロドロの溶岩で、赤く煮えたぎっている。落ちたら、ひとたまりもない。山頂の平らな部分はどのくらい距離があるのだろうか。自分がジャンプして飛び越えることができるのだろうか。子どもには無理でも、幅跳びの選手なら飛び越えることができるのだろうか。ジャンプして失敗して落ちたら火口にまっさかさま、燃えさかる溶岩に落ちてしまうのでは…そんな恐ろしいことを想像しながら富士山の山頂に思いをはせていた。

大人になって初めて富士山頂に登ったとき、初めて火口をこの目で見た。火口は岩と砂利で塞がれており、真っ赤に燃える溶岩など見えない。お鉢巡りをやったが、1周約3キロ。人間にはとても飛び越せない距離。

遠くからは短い距離に見える山頂も、近くに行けば、直径1キロ近くもあるのだ。

見ていないと勝手に妄想が膨らむ。

ちなみにある研究によると富士山が最後に山頂から噴火したのは、約2300年も前のことだという。その後の噴火は、全て山腹からの噴火であるらしい。

だが、平安時代・鎌倉時代の頃には、山頂から煙が出ていたという。

全国を遍歴した西行は富士山を見て、

「風になびく富士の煙の空に消えて 行方も知らぬわが思い哉」という歌を残している。真っ赤な溶岩はないにしろ、噴気が上がっていたのだろう。

さて、富士山の山頂に思いをはせたのは、子どもの頃の自分だけではない。

江戸時代末期、来日した外国人も富士山頂に思いをはせたようで、外国の絵には、富士山頂にヨーロッパ風のお城が描かれたものもある。

明治から昭和にかけて、多くの富士山の絵を残した横山大観。彼の絵には、宝永山が描かれていないようだ。富士山には宝永山は似合わないと思ったのかだろうか。宝永山ができたのは、宝永噴火があった江戸時代なので、横山大観は宝永山を見ているはずなのだ。

ただ、横山大観独自の富士山のイメージというのがあったのだろう。

富士山世界遺産センターには、多くの外国人が訪れるが、自分が写真で見た富士山と違う、雪がないとおっしゃる方もいる。



富士山と言えば、山頂部分が雪に覆われたイメージが強いからだろう。夏は富士山が雲に隠れてしまうことが多いため、あまり見ることができない。また、見えていてもぼやけていることが多い。

雨の日の翌日、晴天の日が見やすいのだが、朝の早い時間帯だけしか見えないことも多い。暖かくなってくると上昇気流が発生し、すぐに富士山は雲に隠れてしまう。

雲一つない夏のきれいな富士山の写真を撮ろうとするのは、なかなか難しい。ただ、夏の雪がない富士山を伝える事も必要なのかなと思っている。

富士山には様々な人が思いをはせ、色々なイメージがある。

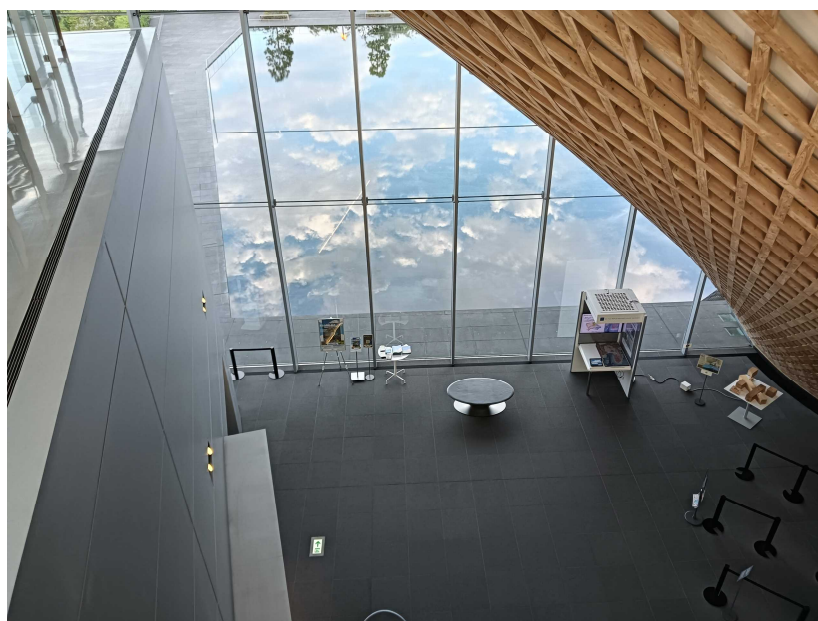
それを和歌に残した人もいるし、絵に描いた人もいる。

富士山世界遺産センターへ来館する皆様には、そんな富士山に対する思いやイメージを少しでも感じて欲しい。



宝永山は雲に隠れている

ある夏の日の富士山とセンター



条件が合えばこんな写真が撮れることもある

センターの水盤に映った空と雲

